

# 八月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

うぐひす

武田弘之 神奈川

うぐひすの呼ぶ声きこゆ法、法華経、法々法華経、華経華経華経と  
うぐひすの別名たのし花見鳥匂ひ鳥また歌詠み鳥と

権力にたちまちなびきゆくさまはかの戦時下と変はることなし  
六十はまだひよつこと思ひ知れ人生百年時代とふ今

受験生の数減りたるに受験難深刻になりゆくといふ世ぞ

極北

影山一男 千葉

もつ焼に二級酒飲みて酔ひし日の渋谷よ戦後の面影残し

六本木行きバス停見つからずわが町なりし渋谷冥界

生家へと首都高の下くぐりたり都電の軌条ありにしようへを

「極北の帯に書かれし惹句消えもうたましひの極北あらず

逝く春のひかりを載せて流れゆく街川に沿ひ水鳥あそぶ

キキとブーバ

大松達知\*東京

売り言葉、買わないようにしていれば「だあれもないの、年寄りばかりで」

A4とB5のように父と子は、つまりは俺とおまえのように

好き好きと言ってるわりに食べることすくなしき家すきやき牛丼

空のように洞ふかいとも海のようにひろいとも、数学Ⅲはわが知らぬ森

だとしても酒のある夜のうつくしさ キキはともあれブーバとなった

あと八十年

水上 比呂美 東京

保育園の入園式で娘の子蟬丸みたいな帽子をかぶる

保育園で馴らし保育がはじまりて生息域がひろがる坊や

六人乗りのベビーカーに乗る一歳児に春の野を行くドナドナ思ふ

をさな子はちひさな木琴たたきをり雨の音せり光の音せり

お腹なかから出るといろいろ大変ね平均余命はあと八十年

☆

☆



水鳥晴子 兵庫

不自由度すすまざりしを言祝がれひと月おきの診察をはる

「花の歌」うたひをさめつホセ役のプラシド・ドミンゴ陶然の面  
星撒けるやうにかがやく蒲公英の午後いちちやく閉づるさびし  
目の下のみちにばらばら走り出て童子四、五人じゃんけん始む  
掛け声は今もかはらぬ「じゃんけんはい」おかつば髪を揺らして女兒は

高野公彦 千葉

誰の死後或いは誰の生前か いま壮麗に八重桜咲く

列島を離れまた寄る秋刀魚らを恋ひつつ食めり大根おろし  
老体のせるか地球が病むせるか昨日寒くて今日は炎暑日  
雨に濡れ道路工事をする人ら議員、投資家などより尊し  
死後のこといつか(あちら)と呼ぶ齡となれど(あちら)の景色浮かばず

奥村晃 作\* 東京

学士会囲碁会常に進展す皆が楽しく遊べるように

全員の試合結果を取りまとめ作成された緻密なる表

奥村は勝率で二位、五十人中成績二位で表彰された

新橋の碁会所もそう満席の全員が高齢の男性である

負けてばかりの我がホトホト嫌になり今期囲碁会は以後参加せず

森重香代子 山口

わが怠<sup>おこた</sup>り攻めたつることびつしりと庭にはびこる春の雑草<sup>あらくさ</sup>  
胸病みて休学せしは七十年まへ修学の旅も叶はざりにし  
手に掬ひ空に放ちし桜ばな夕べ面輪に降りかかり来ぬ  
うすももの蜻蛉の羽のごとき花葉かげに咲けり園の楓は  
かがやかに西日の差せる裏庭に羽根広げたり山禽一羽

桑原正紀 東京

わくらばが葉を擦りながら落つる音さこゆるまでにしづけき真昼  
らくえふに裏おもてあり地に落ちて裏見せるまで見届けたりき  
春もみぢひとり色づき緑陰にまぎれずあるはさびしからむや  
いのちありて見るしろき雲あをき空いのちといふはほんにさびしき  
いちにんの死を見届けて帰る夜の雨音が傘に鳴りやまずけり

狩野一男 東京

日本一大事な憲法記念日の前の日、誕生日で済みません

令和六年五月二日けふからはまたまた更に年寄りらしく

はじめの七十三歳先づ何を行ふべしやなあ桐の花

聴いてゐるだけで好い気になりにけり山崎ハコ<sup>ハコ</sup>の作品集だいつ  
七十代この先のことわからねどリップクリーム縦塗りにせむ

宮里信輝 神奈川

才戸橋近くの川ぞひ人だから一〇〇本以上の桜が咲いて

歩いても来られるくらゐの近さなり一〇〇本以上の桜の森は

見上げれば桜の花なり見下ろせば桜の花びらうすも色の

しんしんとさくら花びら散れるなり風もないのに昼の日なかを

見上げればしんしんしん咲くさくら地上はさくら花びら浄土

小島 ゆかり 東京

母はいま何言はんとす救急車の酸素マスクのなかのくちびる  
何度目かもわからない父と姑ははとそしてまた母と救急車に乗る  
ふるさとのむかしの家へ帰りたい母を置き夜の病院を出て  
病院の裏口に藤の房垂れて夜の臓器がざわざわとする  
あんなにも堂々とじつと立つことは無理だから木より虫になりたい

木畑 紀子 京都

五層なるフィルタが漉すわが部屋のくうき清浄、こころ渾沌  
ゆるキャラに話しかける幼児語のさびしさびしヒトは退化してゆく  
やうやくにつながらしナビダイヤルの無味の声「AIがお答えします」  
ロボットが宅配便を持ちくる日やがて来むたれに礼を言はんか  
軒にツバメ屋根にイソヒヨ庭にメジロああ鳥たちは侵し合ひせず

島田 暉 神奈川

木蓮は空へ向かひて花開く白き花みな天を恋ふるや  
黒髪に散りし桜のひとひらがてふてふになり初恋さそふ  
人生の後半生は仮免許自転車をさけよるよる転ぶ  
耳遠き人と話せるしばしの間月の光の雲にかくれぬ  
身うちみなほほ笑みかはず輪の中に継母まははひとり目をとがらせる

田宮 朋子 新潟

里山のみどり濃くなり水ぎはの猫目草ねこのめくさはすがたを隠す  
うしはこべ、うまごやし咲く野を見をり遠田ゆるゆるすむ田植機  
そのかみの波々迦のつぼみ塩漬しほじせし珍味あんあまにんごちかごろは見ず  
混迷の日本に生れしアリョーシャと思ひつつ読む若松英輔  
戦場にあらす雀の鉄砲をいつぱん抜いて草笛鳴らす

津金 規雄 神奈川

地より出でて三寸ばかりむらさきの三寸あやめ悦色の花  
水平に葉を広げぬる南天をためらはず射る直なる春光  
時は過ぐ万年幄の陰となり咲きつらなれる紫蘭のうへにも  
落花直前しやくやくは強き陽光を裡に秘めつつその時を待つ  
ああ初夏、街川の岸は色ふかし みぎも青柳ひだりも青柳

小山 富紀子 京都

現代の風が中古の風となる一の鳥居を祭列くぐれば  
知り人を祭の列に見つけたり青葉風吹く賀茂の御社みやしろ  
いにしへをしのびて吹くか賀茂の風俄にわか采女の袖をいらへり  
終演の拍手の中にとまどひの拍手もあらむ創作舞踊「こうの鳥」  
とまどひの拍手送れどその夜更け徐々に沁みくる創作舞踊「こうの鳥」

清水 正子 神奈川

返礼品カタログにありし「乗馬券」もらへばよかつた：馬に会ひたい  
殺処分まぬがれし哀れ馬たちのセカンドキャリアならむ「乗馬券」  
天駆けるベガサスのごとと駆けぬけし皁月賞馬のその後を知らず  
寄りみちの時間旅行を楽しみきハマの歌会の日は馬車道で  
黒船のステンドグラス美しき開港記念館カイクワンキニケンで若き日に学びたり

小嶋 一郎 佐賀

日差しにも重さがあるとふと思ふ畑の菜の花こそぞり垂りゐて  
心にもなきことなれど一首詠みまことしやかに清書してゐる  
けふもまた保険勧誘の電話あり「八十八歳」と言へばすぐ切る  
東京の倅は五十半ば過ぎいまだ小五こごの女児育めごてゐる  
「天長節」と称よびゐしことを思ひつつ「昭和の日」遺る家居いへのひと日

福 士 り か 青 森

春もみぢさやぐ露天の湯に入れれば次第に透けてゆく身とところ  
陶板の蓋をはづせば踊り焼きの鮑ぐるりとこちらを向けり  
踊り焼きは踊りが終はれば食べ頃とにつこり笑ふ給仕のひとは  
露に味噌、こごみに胡桃、ぜんまいに辛子醤油を合はせてよろし  
採りたての根曲がり竹を火にくべてほつこり湯気の立つをいたたく

藤 野 早 苗 福 岡

ベランダの横なるヒバの梢の巢にやがて孵らん春仔のガラス  
あの時の巢落ち仔ですとまろき眸の仔鴉訪ね来ん夏の朝  
眠りゐる母の口より玉の緒の出で入り見ゆるごとき春昼  
濁りなき施設の部屋に座して母「押し込められて」とふいに眩く  
くびられて井に葬られし伊藤野枝その名の中にわたくしがゐる

風 間 博 夫 千 葉

引いて出し押しして引出ししまひたりうれしまだまだ使へる箆筒  
リサイクルショップの箆筒引出しを引いては押しして動き確かむ  
テレビ用リモコンは押しボタンのみ押しすに役立つ親指の腹  
天井の木目が顔に見えてゐたなつかしいなあ母住みし家  
さくら花見ごろとなりてさくら餅食べごろ火点しごろは飲みごろ

田 中 愛 子 埼 玉

レジ横のカートの乱れなほしたり前世の罪をつぐなふやうに  
これがまたうす茶のシミになるのだらう転んできた頬のすりきず  
冗談で言つてたけれど身に沁む(三歩すすんで五歩さがる)噫  
一身上の都合とは何、期待してゐたる若きの退会を聞く  
いかづちが鳴ればしばらく外ながめまた本を読む初老のわれら

橘 芳 園 新 潟

生きの上的よきこと一つ子と孫に寺継ぐさだめ強ひず生き来し  
ことばもて道を説かざるすがしさや青葉のそよぎわれを鼓舞する  
吾子の如子ら待つ家に帰らねばならぬママシがわれを威嚇す  
寺の子と気にせざりしと娘言ふ吹奏楽部いとまなかりき  
生きの上的の過誤かも知れぬ子と孫の寺継ぐさだめ断ちたりしこと

高野公彦評論集 令和6年3月刊 二八〇〇円(税別)送料三〇〇円

歌の魅力の源泉を汲む コスモス叢書第1235篇 柘 書 房

著者住所 〒272-0114 千葉県市川市塩焼一―二―二一五〇六

大松達知歌集 令和6年1月刊 二五〇〇円(税別) 送料三〇〇円

ばんじろう コスモス叢書第1233篇 六 花 書 林

連絡先 〒170-0005 東京都豊島区南大塚三―二―四一〇

マリノホームズ1A 六花書林

奥村晃作歌集 令和5年12月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

蜘蛛の歌 コスモス叢書第1232篇 六 花 書 林

著者住所 〒175-0092 東京都板橋区赤塚七―一五―一六



鈴木竹志 愛知

一、太郎、使ひつづけて四十年舶来物のワードは苦手  
一、太郎、見事に刈谷の志士の名を变换したりワードは無理  
天誅組総裁松本奎堂の名もたやすく变换す一、太郎は  
わが町の「刈谷小唄」に唱はれる松本奎堂六戸弥四郎  
一、太郎、弟妹あれどばつとせず三、四郎とか花子とかあれど

原賀 櫻子 東京

鍵だけをポケットに入れ、はじめから遠出と決めて靴をはきたり  
飛行機より速くまでゆく散歩かなけふはサンテグジュペリのさんぽ  
地は五月つじつじの咲く坂で鉄塔とがる町となりたり  
洗濯物なみなみ干せる家々を無事のサインと見つつ散歩す  
歩くだけ歩いた感じ帰りませう柿の葉鮎の待つ食卓へ

水上 芙季 神奈川

「綿100だ」きついかなとて言ひながら西松屋で服ずんずん見て行く  
母の日の母であること不可思議で畳に身体ころがしてゐる  
旅行のプラン立てるみたいに自らの死亡保険を試算する夫  
花柄の傘を開いてくるくる抱つこの子の目がきらきらとせり  
タイプなど知らない知らないかたつむりゆつくりゆつくり歩いてゆかう

大野 英子 福岡

人との距離は計り難くて街に出たけふ二人から足を踏まれる  
対岸の行列出来てゐた店のもう灯ることなき白い看板  
終活をする年齢にて就活をしてゐるこれは幸か不幸か  
わたくしを抜いてゆく人こめかみを流れる汗に夕陽を宿し  
波が立つたびに係留する船の窓が燃えたつ港ゆふぐれ

松尾 祥子 東京

木枯らしに吹き飛ばさるる樹々の葉の電子マネーは闇に消えゆく  
わが好み知りつくしたるパソコンの画面つぎつぎ広告を出す  
言はざりし言葉あまたが渦巻きぬ歌会終はりしのちのいくにち  
人生の意味など思ふことなくて柄の木に柄の花ひらきたり  
青空を望遠鏡に眺めぬし五歳が描きだす海と舟

鈴木 千登世 山口

厚東川の土手あををと並む竹の照葉の隙をみたます春天  
竹群に風のさやぎを聴きをればあふぎ見てゐし人のしのはゆ  
かく清く生きたしと詠む歌びとのまぼろしの背見つつ竹見る  
おそらくは宮先生の面影を竹に見てゐしひとの竹群  
青竹を揺らして春の疾風過ぐ乱反射する光を残し

小島 なお\* 東京

花をつけ種子をはぐくむいとなみのすこし哀しいこの絵巻物  
手の湿りキーホルダーに移しつつ花びらの肉重なる夜道  
半透明の付箋そよがすこの本を泣きたくなくっている顔に乗す  
樹はいつも零すばかりで父母はずつと父母 両手窪めて  
芸人の卵の卵、ラジオから声が聞こえる代々木公園

小田部 雅子 静岡

斉藤 梢 宮城

田に水の入りてたちまち幻想のゆぶぐれの道、犬がはしれり  
水たたへ田はまはだかの月光浴ゆらゆららら時がたゆたふ  
水張田のあさなあさなの反射光にげどころなし 書棚照らさる  
コンサート開演前のざわめきの田植ゑの朝の田の面さざなみ  
向かひ合ふ電車の席に手の甲のさまざまみえて生きの途上

人生の今どのあたり 見上げつつ心にはさむ若葉の葉  
みどりごをおんぶしてゐたあの春のわたしのなかの母性の若さ  
小さい時おしやべりだつたと四十の娘を思ふ青葉の道で  
やがて飛ぶことのうれしさ寂しさか たんぼほの綿毛丸く整ふ  
いくつもの水張田を見て北へゆくアカシアの白い花も揺れてる

うたを味わう―食べ物之歌 ●高野公彦

八月の味 ―瓜のいろいろ―

輪切りして汁したたれるまきは瓜を指  
は盛りゆく白壇の皿 森本 治吉

暑い夏は、瓜の季節である。瓜は種類が  
多く、胡瓜と西瓜が代表的なものだが、ほ  
かに真桑瓜、夕顔、冬瓜、苦瓜などがある。  
昔から、瓜といえは真桑瓜を指し、夏は  
これを井戸で冷やして食べた。ほのかな甘  
みがある。右の歌は、食べる前に、瓜を目  
で楽しんでゐる。歌集『耳』より。

瓜食めば 子ども思ほゆ 栗食めば

まして偲はゆ(以下略)

山上憶良

瓜の歴史は古く、このように万葉集の頃  
から食べていた。催馬楽に「山城の／＼  
わたりの／＼瓜作り／＼なよや／＼らしいしなや／  
瓜作り／＼瓜作り／＼はれ／＼瓜作り／＼我を欲し  
と言ふ／＼いかにせむ(以下略)」とあるから、  
京都の狛という土地が瓜の産地として知ら  
れていたようである。

朝露によごれて涼し瓜の土 芭蕉  
初真桑四つにや割らん輪に切らん

同

うまそうだな、という目で芭蕉は瓜を眺  
めている。瓜が好物だつたようだ。

「瓜売りが瓜売りに行き瓜売れず売り売  
り帰る瓜売りの声」という作者不明の戯れ  
歌があるように、かつては瓜を売り歩く人  
がいたらしい。

瓜は夏の涼味を呼ぶ素朴な食べ物だが、  
残念ながら現在はあまり見かけなくなつた。  
たぶん、西瓜の栽培が盛んになってから瓜  
はしだいに劣勢になり、さらにメロンの普  
及で致命的な打撃を受けたのだろう、と思  
われる。メロンは真桑瓜の変種であるが、  
甘つたるく、かつ瓜くさいので、私は苦手  
である。せめて和食のデザートは真桑瓜に  
したらどうだろうか。